

令和6年度

研究紀要

第20号

秋田県立男鹿海洋高等学校

令和6年度 研究紀要 目次

巻頭言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・校長 浅野 博之

I 研究授業

○実施要項

○学習指導案と分科会報告①（数学科） 授業者：小野 達也

○学習指導案と分科会記録②（水産科） 授業者：大高 英俊

II 研修

○令和6年度秋田県総合教育センター研修講座受講者

○教員研修（実習体験）実施要項・・・・・・・・・・・・・・・・海洋科

○校内職員研修（特別支援）実施要項・・・・・・・・・・・・研修部

III その他の記録

○教育実習生による研究授業指導案

○令和6年度校種間連携研修要項

○令和6年度教職インターンシップ要項

編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・研修部

巻頭言

校長 浅野 博之

教育公務員に関する研修については、教育基本法第9条により「法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない。」と定められ、法令上、職務研修、職免研修、自主研修に大別される。

また、教育公務員特例法21条では教育公務員の研修は「職責を遂行するために絶えず研究と修養に努めなければならない。」とされ、主体的な研修参加への期待と共に、継続的な研修努力義務が定められている。

現実として、我々教師に求められる力量はとても広域で、授業（教科指導）はもちろんではあるが、生徒指導、特別活動、学校保健、部活動、学校行事、とりわけ重要な力量として、保護者との対話を生産的に導く力（保護者対応）、危機管理能力、生徒の心に寄り添う力（カウンセリング）等多岐にわたるため、校内外にかかわらず研修の重要性が問われる中、それらの中核をなす力量こそが授業力であることは周知のことである。

校内研修については、教職員の能力向上を果たすという視点から、学校において様々な研修体系が運用されなければならないことから、本校においても幅広く校内研修を企画し、学校組織（チーム）として教員相互の教師力および授業力向上等を実現する為の重要な手段として、研修部を中心に企画、奨励へと展開することにより、学校全体としての質の向上が図られたものと理解している。

このように、制度化された研修、日常的な力量開発、自主的な研修が相互に機能し最終的に我々教員の力量開発へと繋がるものであると実感する次第である。

最良の研修は、日々の教育実践を通じた生徒との関わりから得るものや、同僚との情報交換（同僚性）、そして主体的で継続的な「教材研究」という日常の中に存在する行為そのものであるのではないか。その日の授業や1日を振り返るといふ無意識の行為こそが、重要なのである。

つまりは、自らの課題と正対し専門性を高めようとする教師にとっては、日々力量開発の好機、いわゆる研修なのであろう。

I 研究授業

○実施要項

○学習指導案・分科会報告①

○学習指導案・分科会報告②

令和6年度 校内研究授業研修 実施要項

秋田県立男鹿海洋高校
研修部

1. 目的

- ・「授業改善重点事項」や「3つの手立て」を意識した研究授業を計画、実践する。
- ・授業参観・研究協議会を通して全職員が成果や課題等を共有し、学習指導力向上に活かす。

2. 今年度の授業改善重点事項

基礎的学力の定着を目指して、生徒が主体的に活動し、成就感が得られるような学習支援を推進する。

〈手立て〉

- ・学習目標とゴールを明確に設定し、それに基づいた授業デザインを考え、生徒との共有を意識して授業に臨む。
- ・生徒の主体性や学習意欲を刺激するような指示・発問を工夫し、対話を通して問題を解決する場を設定する。
- ・学習への興味・関心を高め、学びを深める手段として、ICTを効果的に活用する。

3. 期 日 令和6年11月14日（木）

4. 日 程

1～5校時	8：40	～	13：05	（40分短縮授業）
SHR・清掃	13：05	～	研究授業クラス以外は放課	
研究授業	13：40	～	14：30	（男鹿駅発13：54）
分科会	14：45	～	15：15	
全体会	15：20	～	15：50	

5. 研究授業クラス・授業者・教室

クラス	科目	授業者	教室
1年普通科	数学A	小野達也	1年普通科教室
2年食品科学科	食品管理	大高英俊	2年食品科学科教室

・授業者は、11月7日（木）までに「学習指導案」を作成し、研修部の所定フォルダへ保管してください。印刷・配付は研修部で行います。指導案以外に配付する資料等も、保管していただければ一緒に印刷・配付します。

・授業の参観は、普通教科職員は「数学A」、水産科職員は「食品管理」としますが、適宜両方の授業を参観しても構いません。ただし、研究協議会は、所定の分科会に出席してください。

6. 研究協議会

【分科会】 14 : 45 ~ 15 : 15 (30分間)

	会 場	参加者と役割
分科会① 普通科 (数学A)	1年海洋科教室	参加者：普通科教職員 授業者所感：小野 司会進行：伊勢 記録・報告：安倍
分科会② 水産科 (食品管理)	2年食品科学科教室	参加者：水産科教職員 授業者所感：大高 司会進行：岩谷 記録・報告：鈴木

[進 行]

1. 授業者から所感 (以下の点を含めていただきたい)
 - ・重点事項の手立てについて、今日の授業でどのような工夫をしたか。またその手応え。
 - ・感想や今後の課題、参観者から特に聞きたいことなど。
2. 参観者から感想
 - ・「3つの手立て」について、良かった点 (赤付箋) と課題点 (青付箋) を指摘しながら模造紙に貼る。
3. 「授業のユニバーサルデザイン化=誰にとっても分かりやすい授業の工夫」について、日頃から実践している取り組みを紹介しあう。

【全体会】 15 : 20 ~ 15 : 50 (30分間)

	会 場	参加者と役割
全 体 会	会 議 室	参加者：全教職員 司会進行・記録：伊勢 報告者①：安倍 報告者②：鈴木航

[進 行]

1. 各分科会より報告 …分科会①安倍、分科会②鈴木航
2. 管理職より講評・総括

7. 研修部業務分担

	伊勢	岩谷	鈴木航	安倍
付箋・模造紙準備など	◎		○	
指導案印刷・事前配布	◎			○
分科会司会	普通科	水産科		
分科会記録・全体会報告			水産科	普通科
全体会司会	◎			
会議室の会場設営	◎	○	○	○
記録 (写真)	○			◎

数学科 「数学A」 学習指導案

日時：令和6年11月14日（木）5校時

場所：1年普通科教室

対象：1年普通科11名

授業者：小野 達也

教科書：新 高校の数学A（数研出版）

1. 単元名 「第2章 図形の性質 第1節 平面図形 9 作図」

2. 単元の目標

(1) 垂線、垂直二等分線、角の二等分線の作図方法を理解し、作図ができる。【知識・技能】

(2) 垂線、垂直二等分線、角の二等分線の性質を理解し、作図に利用することができる。

【思考・判断・表現】

(3) 条件に適した作図をするために方針を考え、手順を整理し、作図することができる。

【主体的に学習に取り組む態度】

3. 単元の評価規準

【知識・技能】

・コンパスと定規を用いて、垂線、垂直二等分線、角の二等分線の作図ができるか。

【思考・判断・表現】

・垂線、垂直二等分線、角の二等分線の性質を理解し、作図に利用することができるか。

【主体的に学習に取り組む態度】

・条件に適した作図をするために方針を考え、手順を整理し、作図することができるか。

4. 単元（または題材）について

①生徒観

男子6名、女子5名、計11名のクラスである。どの生徒も意欲的に授業に取り組むが、積極的に発言する生徒が複数名いる一方、物静かで発言しない生徒もいる。個々の理解には差があるため、必要に応じて助言をするようにしている。

②教材観

作図の問題の本質は、その作図方法を考えることにある。そのため、作図をするための方針を考え、手順を整理させてから、作図に取り組ませるようにしている。作図をすることでこれまでに学習した図形の性質の内容の理解を深め、見つめなおすことができる。

③指導観

条件を満たすような作図の方針を考えられるようにさせたい。自分で作業手順を説明できるようにすること、実際に作図できることを目標としたい。全体の共有方法として Figma を利用し、いつでも振り返ることができるようにしたい。

5. 指導計画

①図形の基本	3時間	⑥円の接線	3時間
②角の二等分線と線分の比	1時間	⑦方べきの定理	2時間
③三角形の外心、内心、重心	6時間	⑧2つの円	1時間
④円周角の定理	2時間	⑨作図	4時間（本時4／4）
⑤円に内接する四角形	2時間	⑩確認問題	2時間

6. 本時の学習

①本時の目標

条件を満たす作図の方針を考え、手順を整理し作図することができる。

②本時について

作図の方針を考え、作図することができるようになってほしい。

学習内容の共有方法として、Figma を利用することができるようになってほしい。

③本時の展開

区分	学習活動と内容 【生徒の活動】	学習 形態	指導上の留意点・支援・評価 【教師の活動】	準備・資料等
導入 5分	1. 既習事項の確認 ・垂直二等分線の作図 ・角の二等分線の作図 ・垂線の作図 2. 本時の課題の理解	全体	・電子黒板にこれまでの学習の経過を表示する ・それぞれの内容について作図方法と性質を確認する。	電子黒板 タブレット Figma
本時の目標：作図の方針を考え、作図することができる				
展開 30分	3. 問題文を読み、<作図の方針>を記入する	個人 8分	発問「問題文のキーワードになる部分に線を引き、作図の方針を考えて記入してください。」 ・机間巡視し、様子を観察する。 ・タブレットで調べさせる ・必要に応じて全体で、問題文の内容を確認し補助する。	教科書 プリント タブレット 電子黒板
	4. グループになり方針を共有する。	グループ 5分	・それぞれが書いたものを共有し、グループとしての考え方をまとめさせる。	
	5. 作図の方針を全体で共有する。	全体 5分	・グループごとに方針を板書で発表する。 ＜評価Ⅱ＞	
	6. 作図の方針をもとに、作図をする。	個人 8分	発問「作図の方針をもとに、作図をしてください。」 ・机間巡視し、様子を観察する。	
	7. それぞれの作図をグループで共有する。	グループ 4分	・作図したものを見せ合い、共有させる。	
まとめ 15分	8. まとめ ・グループごとに作図を動画で撮影し、Figma にアップする。 ・それぞれのグループの作図の様子を確認する。 ・まとめ、振り返りと自己評価を記入し、プリントを提出する。	グループ 10分 全体 2分 個人 3分	・作図の様子がわかるような撮影方法をするよう指示する。 ＜評価Ⅰ＞ ・まとめ、振り返りと自己評価の記入を促す。	電子黒板 Figma タブレット

I 【知識・技能】、II 【思考・判断・表現】、III 【主体的に学習に取り組む態度】

分科会報告書

教科・科目名（ 数学・数学 A ）

記録者名（ 安倍 聡子 ）

1. 授業者より

「条件を満たす作図の方針を考え、手順を整理し作図することができる」という目標のもと、演習を行ってきた。また、学習内容の共有方法として、Figma を利用することができるようになってほしいと思っている。

作図については、高校入試での正解率・正解人数が今の1年生の0%0名（60°の作図）、今の2年生が38%11名（円の接線の作図）、今の3年生が3.6%1名（2点が重なる折れ線の作図）、その前が6.7%1名（同じ大きさの角の作図）と本校入学者にとって苦手としている、定着度が低い単元である。普通科だけが履修する数学Aの内容であるが、図形の性質の定着と合わせて、作図方法を理解させたい。教材観にも記載しているが、作図の問題の本質は作図方法を考えることにあるので、この単元を通して各自が作図の方針をたてられるようになってほしいと思い授業に臨んだ。今回の演習のスタイルは今日で3回目になるが、生徒の様子を見ると・・・と感じている。

学習内容の共有方法として、以前はJamboardを使用していた。後継のFigmaの研修に参加して以降、Figmaを利用した共有方法を検討してきた。今までは授業のまとめを打ち込ませていたが、今回は作図の単元なので、実際に作図している様子を動画で撮影する方法に取り組ませている。前回、前々回も同様の作業を行ったこともあり、生徒の作業は大変順調であった。生徒に話を聞いたところ、説明しながら作図しているところを撮影してもらうことで印象に残りやすい、授業内容を振り返ることができて理解につながるという前向きな意見であった。今後は板書や生徒の問題解決場面も記録に残すことで、生徒が学びを深め、主体性の向上や学習意欲の喚起になればと考えている。

今年度の授業改善重点事項にある、「基礎学力の定着」「生徒が主体的に活動」「成就感が得られるような学習支援」を推進することを意識して授業を進めた。その「手立て」として今回の授業が適切であったかどうか、是非忌憚のない意見をお願いします。

2. 協議内容1

「良かった点」

①学習目標の明確化

- ・導入に目標と授業の流れ(時間配分)の確認が板書でなされており、流れが常に見える化されている。
- ・また、導入時の動画とキーワードによる分かりやすさ、取り組みやすさがとても効果的だった。
- ・「段階を区切って解く」を共有させている。これにより、ゴール手前のポイントに向かうので取り組みやすい。

②発問の工夫

- ・生徒が返答しやすい発問および雰囲気となっていた。
- ・発問の際、「キーワード」や「ポイント」は何かということを確認しながら考えさせている点。
- ・答えは言わずに、ヒントや促しを全体、班、個人にしていた点。

③ICT の効果的な活用

- ・ICT を有効活用しており、作図の様子を「撮影」という記憶に残る活動で残し動画で発表することで、思考プロセスの習得・共有に効果大である。
- ・ICT を生徒の活動と結びつけている。しっかり指示も通っているため、予想以上にスムーズに進んで、すばらしいと思った。
- ・他の生徒が作図を行っている動画を真剣に見ていた。作業を伴う学習に効果的。
- ・「見やすい動画とは…」のように、プレゼン力など+ α の力がつくと思った。
- ・「撮影」という活動によって緊張感が生まれ、また、操作することでより生徒の印象に残ると思った。

④その他

- ・まとめ、振り返りなど自己評価の機会がある。
- ・班別による意見の出しやすさ、協働性の伸長が見られた。
- ・生徒に動きがあってよい。

「課題点」

① 学習目標の明確化

- ・キーワード（ことば）習得にもう少し意識を向けさせたい。
- ・問題が少し簡単かと思ったが、入試の際、本校入学者が苦手としており、定着度が低い单元だという生徒の実態の話聞いて納得した。

②発問の工夫

- ・生徒の返答(解答)が単語。話す力(説明力)を養う上でも、「文」で答えさせたい。
- ・先に進みたい、作図を進めたい、という生徒のやる気を活かす方法はないか、と考えた。
- ・ヒントが多く、どちら(別解)を見ていいか分からないように感じた。

③ICT の効果的な活用

- ・ある班の動画を流しているときに、別の方法の説明が入り、生徒の視点が黒板に移ってしまったため、その班の動画がスルーされたのが残念だった。

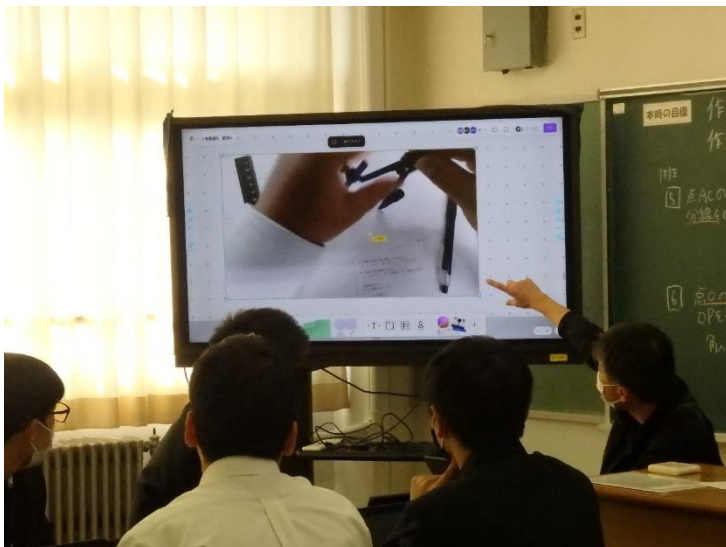
④その他

- ・「キーワード」をどう認識するべきかをもっと考えさせたい。
- ・「折り目の線→垂直二等分線」との認識を、「折り目線⇔垂直二等分線」との認識に改善させたい。

- ・発展・応用のために、生徒に問題を作らせてみたい。

3. 協議内容2（授業のユニバーサルデザイン化について）

- ・方針を共有することで、理解を共有することができていた。
- ・グループになることによって、理解できない子に教え合うことができるなど、班編成の工夫があればよいと思った。



食品科学科 「食品管理」 学習指導案

実施日：令和6年11月14日（木）
場所：化学分析室
対象：2年食品科学科 8名
授業者：大高 英俊
教科書：食品管理（文部科学省）

1. 単元名 第5章 食品の安全管理
第2節 安全管理システム
第1 危害要因分析・重要管理点方式（HACCP システム）
5 HACCP プランの作成
(1) 手順1 HACCP チームの編成
(2) 手順2 製品説明書の作成・手順3 意図する用途及び対象となる消費者の確認
(3) 手順4 製造工程図の作成 (4) 手順5 製造工程図の現場確認
(5) 手順6 危害要因分析の概要【原則1】（本時）
(6) 手順7 重要管理点の決定【原則2】
(7) 手順8 妥当性の確認がとられた管理基準【原則3】
(8) 手順9 モニタリングの設定方法【原則4】
(9) 手順10 改善措置の設定【原則5】
(10) 手順11 HACCP プランの妥当性の確認と検証の手順確立【原則6】
(11) 手順12 記録と保存方法の設定【原則7】

2. 単元の目標

- (1) 食品の安全管理について理解できる。
- (2) 食品の安全管理に関する課題を発見し、衛生管理の方法や安全管理システム、食品添加物に着目して合理的かつ創造的に解決できる。
- (3) 食品の安全管理について自ら学び、主体的かつ協働的に取り組むことができる。

3. 単元の評価規準

【知識・技術】

食品の安全管理について理解している。

【思考力・判断力・表現力】

食品の安全管理に関する課題を発見し、衛生管理の方法や安全管理システム、食品添加物に着目し、合理的かつ創造的に解決しようとしている。

【主体的に学習に取り組む態度】

食品の安全管理について自ら学び、主体的かつ協働的に取り組もうとしている。

4. 単元（または題材）について

①生徒観

発言を積極的に行う生徒が多く、自ら学び、学習に向かう姿勢も良い。しかし、興味関心がない場合は、授業に集中できない生徒も少数いるため、わかりやすく、日常生活に関連付けた内容を学習させる必要がある。

②教材観

本時は HACCP の危害要因を予測し、重要管理までの手順を学習する。衛生管理が不十分の場合に起こりえる危害要因について考えさせたい。

③指導観

HACCP でコントロールするもの、衛生標準作業手順や一般的衛生管理でコントロールする部分の判断力を身に付けさせる。また、日常生活から衛生管理を意識させたい。

5. 指導計画【第5章 食品の安全管理】

工場の衛生と安全管理……………10 時間
安全管理システム……………12 時間（本時4 / 12）
食品添加物…………… 3 時間

【第6章 食品管理関係法規】

食品の安全に関する法規……………3 時間
食品の規格に関する法規……………2 時間
食品の表示に関する法規……………2 時間

6. 本時の学習

①本時の目標：【食品製造における危害要因を理解する】

②本時について

総合実習の缶詰製造時に起こりえる危害要因を分析し、対応策を考えさせる。製造工程一覧図から危害要因をプリントに記入させ、対応策を発表させる。

③本時の展開

区分	学習活動と内容 【生徒の活動】	学習 形態	指導上の留意点・支援・評価 【教師の活動】	準備・資料等
導入 5分	1. 前時の復習 ・前時の復習をする。	全体	・本時の学習内容と関連付けるため、既習事項の復習から始める。	前時からの学習ノート
	2. 本時の目標の提示	全体	・本時のプリントを説明する。	スクリーン
本時の目標：食品製造における危害要因を理解する。				
展開 35分	3. 本時の流れの理解 ・学習の見直しをもつ。	全体	・本時の授業展開を説明する。 ・課題の取組のイメージを持たせる。	スクリーン
	4. 個人の課題解決 ・食品製造中に発生してはいけない問題を発表する。 ・どんな危害要因があるかを確認する。【データ収集】 ・危害要因分析表の作成と第2欄の判断をする。【第1欄と第2欄】	個人 全体	【発問】「何が危害に当たるのか？」 ・アメリカと日本の危害の考え方の違いの説明。 ・表5-15の説明と過去の事故例を挙げて説明する。 ・プリント記入方法を助言し、自分の考えをプリントに書かせる。	プリント
	5. 個人の課題解決 ・危害要因分析表の作成と第3欄の判断をする。【第3欄と第4欄】	個人 全体	・重要な管理かどうかを判断させる。 各自の考えをプリントに記入させる。	
まとめ 10分	6. 個人の課題解決 ・危害要因分析表の作成と第5欄の方法を考える。【第5欄と第6欄】 ・本校における物理的危険要因（金属片）の除去方法を考え、発表する。 ・本校における清潔区域と汚染区域の分ける方法を考えさせ発表させる。	個人 全体	・管理手段の判断となる後の工程での除去方法を考えさせる。 【発問】「金属探知機が本校にはないが、どのように金属片を管理していくか？」 ・【発問】「食中毒の発生となる汚染区域と清潔区域が区別されていない場合、HACCPの認証取得はできるか？」	プリント プリント
	7. まとめ ・本時の振り返りをし、プリントを提出する。	個人	・プリントで学習内容を確認し、日常生活で気を付けることなど確認させる。自宅での調理や保存方法を考えさせ、何ができるのかを記入させる。後日、コメントをして返却する。	振り返りの記入（プリント）
	8. 次時の内容の理解	全体	・次時の連絡をする。	

①食品製造中に起こりえる危害要因を説明できる。
②危害要因の管理手段【第5欄】を判断できる。
「発表観察、プリント」【思考力・判断力・表現力】

分科会報告書

教科・科目名（ 水産・食品管理 ）

記録者名（ 鈴木 航 ）

1. 授業者より

プリントやスライドの文字や色を見やすい配置、フォントを工夫した。また、導入やまとめで生徒の意欲や理解度を記入させ、生徒一人ひとりの疑問点・理解度を確認できるように工夫した。普段の授業から実生活や家での食品の調理方法や、管理方法などの実用的な知識をクイズとして取り入れている。普段は積極的な動きを見せる生徒だったが、緊張からか動きが悪かった。

2. 協議内容1

「良かった点」

①学習目標の明確化

- ・導入で授業内容のアンケートを行い、生徒の意識・意欲の確認をし、何を学ぶのかはっきりしていた。
- ・サバ缶実習の流れとリンクした授業内容のため、生徒もイメージしやすくわかりやすかった。
- ・身近な内容や実体験を元にした内容であり、実習と座学につながりがある授業展開だった。

②発問の工夫

- ・生徒が自分の考えを発言できる雰囲気だった。
- ・個人の考えを尊重し、必要な部分は補足を入れ全体に共有していた。
- ・机間巡視や助言を適切に行い、生徒に寄り添った授業展開であった。

③ICT の効果的な活用

- ・本時の目標が常に表示され、生徒の目に入るような状態であった。
- ・スライド、プリントのフォントがユニバーサルデザインであったり、配色も配慮されていた。

「課題点」

① 学習目標の明確化

- ・生徒の配置の工夫。狭そうに感じた。

②発問の工夫

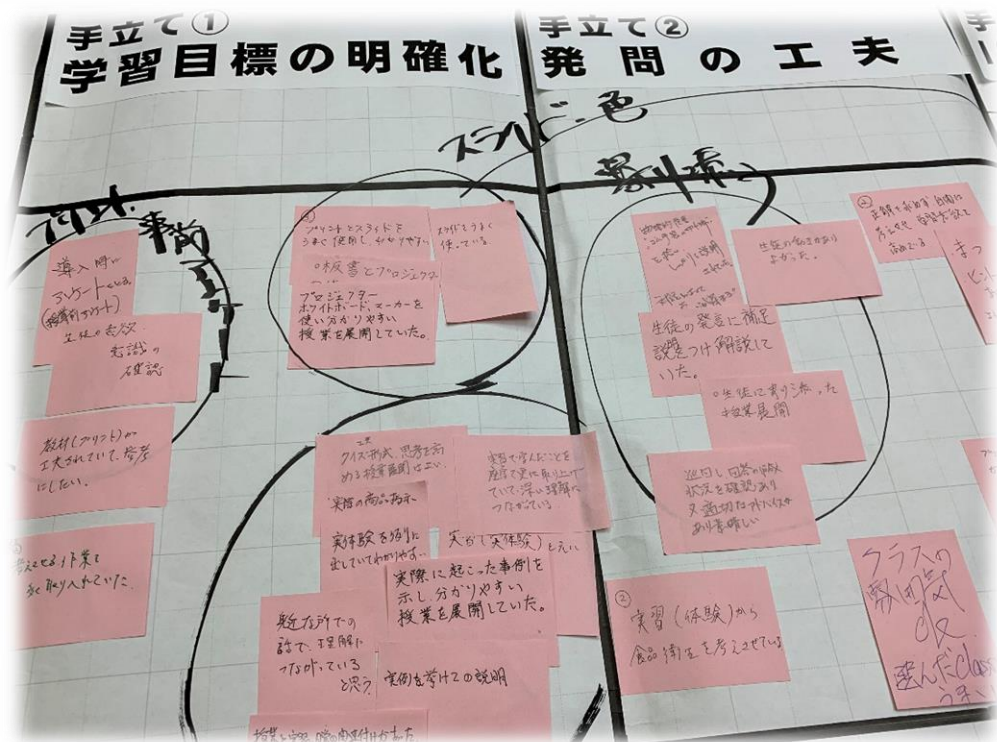
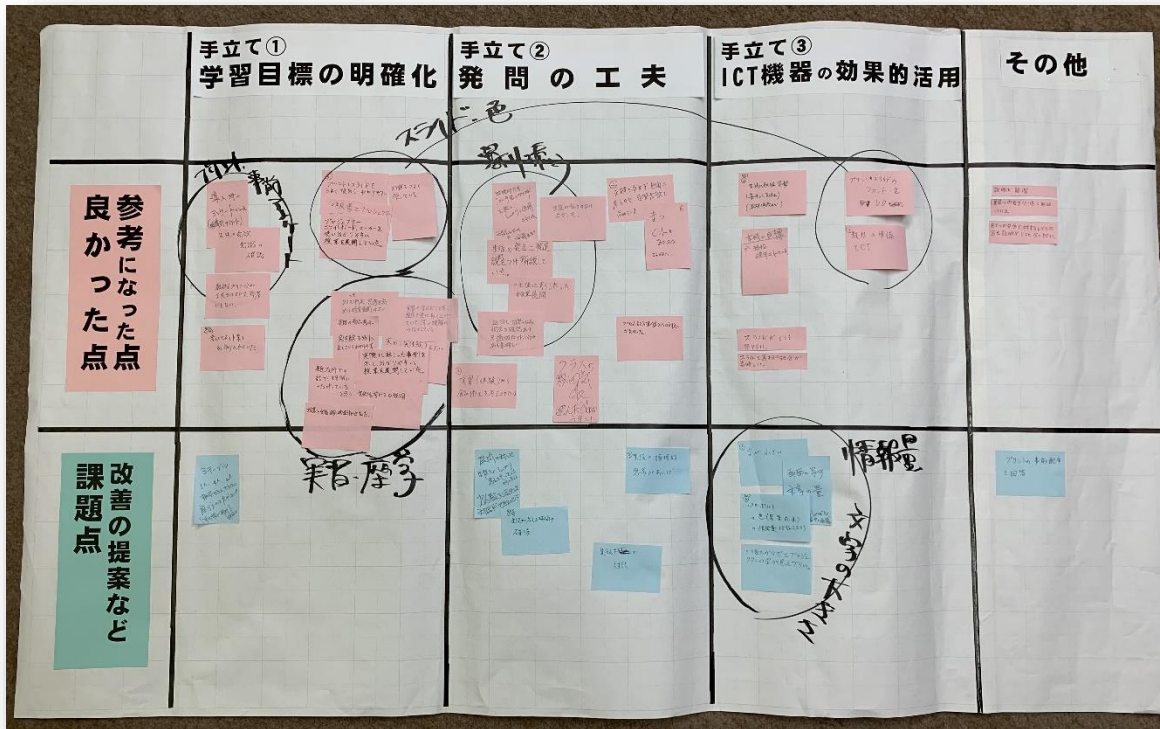
- ・教員と生徒間の対話はあったが、生徒間の協議や共有があってもよかった。

③ICT の効果的な活用

- ・スライドに対しての、文字の量や大きさなど情報量が多い。

3. 協議内容2 (授業のユニバーサルデザイン化について)

- ・チョークの色や、スライドの背景の色など小さな工夫をしていくことが重要なのではないかな?
- ・板書や表記の仕方など、誰にとってもわかりやすい授業づくり、生徒が学びに向かう授業づくりを心がける必要がある。



Ⅱ 研修

○秋田県総合教育センター

研修講座受講者

○教員実習体験研修

○校内職員研修

令和6年度 秋田県総合教育センター研修講座受講者名簿（A・C講座）

（敬称略）

- A-29 県立学校新任教頭研修講座 5/20（月）、6/24（月）
参加者；（教頭）澁谷明人
- A-34 高等学校新任学年主任研修講座 5/28（火）、6/27（木）
参加者；（教諭）小川智大 （教諭）中泉るり子
- C-15 「話す力」、「書く力」を育む英語科の授業 7/30（火）
参加者；（臨時講師）安倍聡子
- C-33 発達の段階に応じた情報モラル教育の理解と実践 9/6（金）
参加者；（教諭）齋藤美津子 （実習助手）鈴木 元
（実習助手）三浦誠一
- C-35 基礎的な動画編集とその活用 7/30（火）
参加者；（教諭）椎名 知
- C-37 高等学校におけるプログラミング演習 7/1（月）
参加者；（教諭）秋島俊文
- C-38A 学校におけるICT活用の基礎 8/8（木）
参加者；（実習助手）鈴木 元
- C-38B 学校におけるICT活用の基礎 8/19（月）
参加者；（実習助手）三浦誠一
- C-41 不登校や集団不適應の悩みを抱えた児童生徒の支援 8/8（木）
参加者；（教諭）佐々木千晶 （養護教諭）櫻庭早由利
- C-44 教育相談に生かすカウンセリングの技法 10/25（金）
参加者；（実習助手）鈴木 元 （実習助手）三浦誠一
- C-47 自校におけるインクルーシブ教育の推進 8/23（金）
参加者；（教諭）岩谷裕次 （教諭）小林道子、
- C-48 発達が気かりな子どもと保護者の支援 9/6（金）
参加者；（教諭）関口 収

教員研修（実習体験）実施要項

海洋科・研修部

期 日：令和6年7月31日（水）

※ 天候不良の場合は中止とします。

目 的：普通科と水産科を併せ持つ学校として、普通科教員は、水産科生徒の日ごろの学習・探究活動を体験し、今後の指導に活かす。また、水産科職員は、普段の生徒への指導を再確認し、今後の生徒への明確な作業手順や安全指導を確認する。

対 象：全教員

内 容：真山丸・NAMAHAGE体験乗船

<日程>

9：00～14：00 体験乗船（釣り実習） （9時艇庫集合）

<乗船場所>

真山丸→艇庫 NAMAHAGE→漁協
（艇庫で準備して向かいます）

- ※ 駐車場所は艇庫前でお願いします（できる限り相乗りで駐車台数を減らすようお願いします）。
- ※ 動きやすい服装（例 運動着・作業着）で参加してください。
- ※ 帽子・タオルを準備してください。
- ※ 長靴か運動靴で参加してください。（革靴は不可）
- ※ 各自飲み物・昼食を準備してください。
- ※ 乗り物酔いが不安な方は、酔い止めの薬を飲んできてください。
- ※ 釣り道具は貸し出しますが、こだわりの強い方は持参してください。

実習代：500円（サビキ、エサ、おもり など）

令和6年度 校内職員研修実施要項

研修部

1. 目的 発達障害や特別支援に対する基本的な考え方、外部機関との連携事例などを共有することで、本校の特別支援のあり方を考えるきっかけとする。
2. 日時 令和6年6月25日（火） 15：20～16：25（65分）
3. 対象 本校職員
4. 場所 本校会議室
5. 講師 荒川 祐介氏（臨床心理士・公認心理師）
秋田県発達障害支援センター「ふきのとう秋田」センター長
（秋田県立医療療育センター内）
6. 研修テーマ 「特別支援を要する生徒への対応を考える」
7. 次第 ①校長挨拶
②講師紹介
③講義
④質疑応答（時間がなければ省略）
⑤閉会
8. 準備
 - ・プロジェクター
 - ・スクリーン
 - ・パソコン（インターネットに接続された状態のもの）
 - ・マイク（必要に応じて）
 - ・資料印刷
 - ・題字（研修テーマ・講師）
 - ・会場設営※研修部で準備
9. その他
 - ・講師控え室は図書室

 - ・講師に話していただきたいことや聞きたいことがある方は研修部までお知らせください。

《講演の主な内容》

①「障害」とは

- ・障害とは、社会の関係性（環境）のなかで生じるものであり、具体的には「生きづらさ」として表れるものを言う。
- ・特別支援とは、「本人を変えよう」というアプローチではなく、本人を取り巻く「環境を変えていこう」とする営みである。
- ・障害には、「目に見える障害」に加えて「目に見えない障害」がある。周囲にはわかりづらく、この「わかりづらさ」が「理解のしにくさ」や「共感のしにくさ」につながり、結果として「支援の遅れ」になっていることが多い。

②取り組み例

- ・入学試験における配慮（筆談面談・紙面指示・時間延長など）（県内大学）
- ・板書の撮影許可、遮音用ヘッドホンなどの使用許可（県外大学）
- ・個別指導計画、学習サポーター配置、特別支援チームとの連携（県内高校）
- ・学びなおしクラスの編成、ハローワークと連携した障がい者就職支援（県内高校）
- ・授業や教室のユニバーサルデザイン化（県内高校）

③学校でできる支援

- ・まずは組織として情報を共有することが大切
- ・「学習の困難さ」は考える以上に子どもたちの負担になっており、学習と生活のサポートが大切。
- ・今の教育現場でできることには限りがあるが、「校内で相談しやすい組織づくり」「校外へ相談しやすい組織づくり」が重要
- ・高等学校特別支援チーム、障害者就職・背活支援センターなど、積極的に外部の機関の利用を。



Ⅲ その他の記録

- 教育実習生による研究授業
- 校種間連携研修講座要項
- 教職インターンシップ要項

保健体育科「保健」 学習指導案

日 時：令和6年6月14日（金）3校時
場 所：2年食品科学科教室
対 象：2年食品科学科8名
授業者：平成国際大学スポーツ健康学部4年生
教科書：現代高等保健体育(大修館書店)

1. 単元名 「生涯を通じる健康」5 避妊法と人工妊娠中絶

2. 単元の目標

(1)個人及び社会生活における健康・安全について理解を深めるとともに、技能を身に付けるようにする。

【知識・技能】

(2)健康についての自他や社会の課題を発見し、合理的、計画的な解決に向けて思考し判断するとともに、目的や状況に応じて他者に伝える力を養う。【思考・判断・表現】

(3)生涯を通じて自他の健康の保持増進やそれを支える環境づくりを目指し、明るく豊かで活力ある生活を営む態度を養う。【主体的に学習に取り組む態度】

3. 単元の評価規準

【知識・技能】

・家族計画の意義や人工妊娠中絶の心身への影響などについて、理解したことを言ったり書いたりしている。

【思考・判断・表現】

・性的成熟に伴い適した避妊法を選択するために、その情報を適切に整理している。望まない妊娠と人工妊娠中絶の影響や課題を発見している。

【主体的に学習に取り組む態度】

・生涯の各段階における健康について、課題の解決に向けた学習に主体的に取り組もうとしている。

4. 単元（または題材）について

①生徒観

男子生徒4名、女子生徒4名、計8名のクラスである。積極的に発言をしながら授業を受ける生徒と、落ち着いた様子で授業を受ける生徒がいる。反応が良い生徒だけとやりとりをするのではなく、クラス全体に発問をするなどして、積極的に取り組むように促したい。

②教材観

本時は、家族計画の意義、適切な避妊法、人工妊娠中絶が心身に及ぼす影響について学ぶ。自身の将来設計を考え、望まない妊娠を避けるために必要な内容である。また、妊娠した場合に特別な理由があれば、母体の心身への影響を理解した上で、人工妊娠中絶を選択する権利があることを学ぶことができる内容である。

③指導観

自身の将来設計のために、必要な家族計画や望まない妊娠を避けるために適切な避妊法について、発問を通じて理解させたい。また、人工妊娠中絶が認められる条件や人工妊娠中絶の心身に及ぼす影響を教科書や電子黒板、プリントを使いながら理解させたい。

5. 指導計画

- | | |
|------------------------|----------------------|
| ①ライフステージと健康・・・1時間 | ⑥結婚生活と健康・・・・・・・・1時間 |
| ②思春期と健康・・・・・・・・1時間 | ⑦中高年期と健康・・・・・・・・1時間 |
| ③性意識と性行動の選択・・・・1時間 | ⑧働くことと健康・・・・・・・・1時間 |
| ④妊娠・出産と健康・・・・・・・・1時間 | ⑨労働災害と健康・・・・・・・・1時間 |
| ⑤避妊法と人工妊娠中絶・・・・1時間(本時) | ⑩健康的な職業生活・・・・・・・・1時間 |

6. 本時の学習

①本時の目標

・家族計画の意義と適切な避妊法、人工妊娠中絶が心身に及ぼす影響を理解する。

②本時について

- ・家族計画の意義と適切な避妊法について理解できる。
- ・人工妊娠中絶が心身に及ぼす影響について理解できる。

③本時の展開

区分	学習活動と内容 【生徒の活動】	学習 形態	指導上の留意点・支援・評価 【教師の活動】	準備・資料等
導入 5分	1. 前時の学習内容の確認	全体	・前時の学習内容を確認し、本時の学習内容とのつながりを説明する。	電子黒板
	2. 本時の目標の提示		・本時の目標を板書する。	黒板
本時の目標：家族計画の意義と適切な避妊法、人工妊娠中絶が心身に及ぼす影響を理解する。				
展開 35分	1. 家族計画の意義と避妊法 ・人生設計を考える。 ・家族計画について理解する。	全体 全体 個人	・人生設計を考えさせる。結婚したいか、いつごろ、子どもは欲しいかも含めて考えさせる。 【発問】パートナー同士で子どもを産むかどうか考える場合、考えるべきことはなにだろうか。 ・家族計画について説明し、教科書とプリントを用いて理解させる。	電子黒板 電子黒板 教科書 プリント
	・コンドームと低用量ピルの特徴を理解する。 ・避妊法を選択する視点から見たコンドームと低用量ピルを理解する。	個人 全体	・避妊法の代表的なものとして、コンドームと低用量ピルの特徴と避妊法を選択する視点から見た共通点・相違点を確認させる。	教科書 教科書資料① プリント 教科書側注① 電子黒板
	・正しいコンドームの使用方法を理解する。	全体	・正しいコンドームのつけ方の動画視聴(4分07秒)NPO法人ピルコン	動画視聴
	・望まない妊娠はなぜ起こるのか考える。	全体	【発問】望まない妊娠はなぜ起こるのか考えよう。 ・望まない妊娠は避妊をおこなわなかったり、効果が不確かな避妊法を用いたりすることで起こっていることを理解させる。【評価Ⅱ】	教科書 教科書特設② 電子黒板 プリント
2. 人工妊娠中絶 ・人工妊娠中絶が認められる条件や人工妊娠中絶による心身への影響を理解する。	全体	・人工妊娠中絶が認められる条件や人工妊娠中絶の方法、人工妊娠中絶による心身の影響を説明する。	教科書 電子黒板	
・妊娠満12週以降に人工妊娠中絶を実施した割合からどのような問題があるのか読み取る。	個人	・教科書資料②のグラフからどのような問題が読み取れるか考えさせる。	教科書資料②	
・緊急避妊法について理解する。	全体	・緊急避妊法について理解させる。 ・電子黒板に緊急避妊を必要としたグラフを提示し、実際にどのようなときに緊急避妊法が必要になったのかを理解させる。	教科書 電子黒板	
まとめ 10分	1. 本時のまとめ ・本時で学んだ、家族計画の意義や人工妊娠中絶の心身に及ぼす影響をまとめる。	全体 個人	・本時の振り返りをする。 ・本時で学んだ、家族計画の意義や人工妊娠中絶の心身に及ぼす影響をまとめプリントに記入させる。【評価Ⅰ】	電子黒板 プリント

令和6年度校種間連携研修実施要項

- 1 目的 職業に関する学科等の授業を参観することにより、これまでの実践を通じた経験を踏まえ、現在指導の対象としている児童生徒へのキャリア教育を意図的・計画的に推進する資質能力の向上を図る。
- 2 主催 秋田県教育委員会
- 3 期日 令和6年9月12日(木)
- 4 会場 秋田県立男鹿海洋高等学校
- 5 対象者 秋田県公立小・中学校及び義務教育学校の教諭として、採用後5年目を迎える者とする。ただし、採用時に初任者研修対象外となった教員も含むこととする。
小学校教諭2名 中学校教諭4名 計6名
- 6 日程及び内容
 - 12:20～12:40 受付
 - 12:45～12:55 諸連絡
 - 13:05～13:55 授業参観
 - ・課題研究「作品制作(試作品)」
(食品科学科)
 - ・水産海洋基礎「ロープワーク」
(海洋科)
 - 14:05～14:55 施設見学、体験(風と海の学校 あきた)
 - 15:05～15:55 情報交換(会議室)
- 7 その他
研修対象者は実践的指導力向上期であることを意識し、本研修の運営に積極的に関わる。

令和6年度教職インターンシップ実施要項

研修部

○期 間 令和6年9月25日（水）～27日（金）（3日間）

○実 習 生 秋田大学理工学部3年生 取得予定免許：高校理科（化学）
（2名） 工業（工業化学）

秋田大学理工学部3年生 取得予定免許：中学高校数学

○控 え 室 職員休憩室

○実習計画

9月25日（水）

- ・オリエンテーション
- ・授業参観 理科：3校時化学基礎（2海）4校時化学基礎（2普）など
数学：2校時数学I（1海）4校時数学探究（3食）など
- ・実習体験 5～6校時総合実習（2食）
- ・放課後 日誌記入、部活動見学 その他

9月26日（木）

- ・終日、秋田大学大学院「ふるさと教育実地研修」に帯同する
【午前】 オリエンテーション
海洋科、食品科学科の実習体験
学校説明
授業参観：数学探究（3普）
【午後】 「風と海の学校あきた」の見学・体験
（プール、シミュレーター他）

9月27日（金）

- ・授業参観 理科：3校時生物基礎（3普）など
数学：1校時数学A（1普）3校時数学I（2普）など
- ・実習体験 4～6校時水産海洋基礎（1食）
・放課後 日誌記入、部活動見学 その他

編 集 後 記

今年度は、「創立20周年記念式典」をはじめ、「風と海の学校あきた」の開所、統合に向けた合同委員会の立ち上げなど、本校が新しいステージに向かう節目となる一年でした。今後は、これまでの歩みを大切にしつつ、柔軟な発想と行動力が必要になるものと感じております。

さて、学校教育を取り巻く環境はめまぐるしく変化しており、これまでの経験だけでは対応できない場面が多くなりました。このような状況の中、教職員一人ひとりが自らのキャリアを振り返り、主体的に研修をデザインしていくことが益々重要になっています。来年度以降も、本校教職員の有意義な研鑽の場を設けられればと考えております。本紀要を今後の研修および教育活動にお役立ていただければ幸いです。

最後に、今年度の研修活動にご協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。

令和7年2月発行

研究紀要 第20号

編 集 秋田県立男鹿海洋高等学校 研修部
発 行 秋田県立男鹿海洋高等学校 研修部